

---

# ナルト 木の葉の守護炎

カンザス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ナルト 木の葉の守護炎

### 【Nコード】

N8704K

### 【作者名】

カンザス

### 【あらすじ】

オリキャラが主人公の小説です。しかも主人公最強なのでそういうのが嫌いな人はやめておいた方がいいと思います。

流れは第七斑に一人多く加わった主人公。この後どうなる。というものです。どうかよろしく願います。

藤崎ライター(前書き)

始めハシヨリすぎましたすいません。

## 藤崎ライタ

忍者になるために通るアカデミーに一人の少年がいた。この少年の名はライタ。九尾によって親を殺され、力が欲しくてアカデミーに入った。

「明日は忍者学校の卒業試験だぞ！！ お前は前回もその前も試験に落ちてるー」

アカデミーの先生イルカの説教が始まった。もちろん怒られているのはアカデミーのいたずらっ子ナルトだ。

「はいはい」

ナルトが言った一言はイルカを怒らせ変化の術の復習テストを行うことになった。みんながしつかりと変化する中ナルトは裸の女に変化しそれを見たイルカは鼻血を吹いて倒れた。

「ギャハハハハ！ 名付けてお色気の術」

また説教が始まる。いつものことなので気にはしない。そしてこの日は終わった。家に帰りなにも言わずにベッドに横になる。涙をこぼしながら孤独を感じていた。

次の日、卒業試験があり課題は分身。五人に分身してクリアした。ナルトは外のブランコに座っていた。トゲトゲの金髪の髪をなびかせながら

「よお、ナルト試験どうだった？」

そう聞くとナルトは黙って走っていった。

## 試験

説明会の日、

「あつ、ナルト受かってたのか」

そう聞くとナルトは

「あたりまえだってばよお！俺を誰だと思ってんだ」

イルカ先生が来るまでの間全員思い思いの時間を過ごす。

「三人一組を組んでもらい一人の上忍が付く。ーじゃあ七斑春野サクラ、うずまきナルト、うちはサスケ、藤崎ライタ、七斑は一人人数が多いが我慢してくれ」

「ふう、斑ね、まあナルトとだしいいか」

昼が過ぎた。

「何で俺たちの斑だけこんなに来るのがおせーんだってばよ。ほかの斑は新しい先生と一緒に引っつまうし」

「ちよつとナルト何やってんの」

そう声がしてナルトの方を見ると黒板消しでブービートラップを仕掛けていた。まあひっかからないと思うが。

扉に手がかかった。あけた瞬間入ってきた者に黒板消しがジャストミート。入ってきた者は銀髪の髪で右目を額当てで隠していた。

「んー、なんて言うかお前等の第一印象は・・・嫌いだあ」

なんだこいつ。ライタはそう思った。自己紹介が始まりライタの番がきた。

「名前は藤崎ライタ。あんたを信用した訳じゃないから教えることはなにもない」

そういつて自己紹介を終えた。ライタは同じ境遇のナルトぐらいしか心を許してしゃべることはない。

「明日から任務をやるぞ。まずはこの五人であることをやる。サバイバル演習だ」

斑員は不満を言い始めた。そしてまたカカシが口を開く。

「――この試験は脱落率66パーセント、超難関だ。全員の血の気が引く。そしてその日の説明は終了。（もしかしたらあの術を使うことになるかもな）そして眠った。」

## 演習

次の日案の定カカシは遅れてきた。

「おっそーい」

ナルトたちが怒る。

「ここに鈴が三つある。ー三つしかないから必然的に一人は丸太だ。殺す気でかかってこい」

ナルトはスタートとも言っていないのにクナイを抜き、投げたはずだが、カカシが後ろに回り押さえたため阻止された。

（おもしろくなってきた）

「よいスタート」

しばらくしていつ頃襲うか考えていると

「なんじゃこりゃあ」

ナルトの声が聞こえた。やられたか、ならそろそろいくかな。

「ライタか。成績はそうよくはなかったな。」

「先生黙って始めよう。纏い火 通常型」

そう言っ て印をくみ終わるとライタの身体が蛇のような火に纏われ始めた。そしてすぐに殴りかかる。カカシはガードしようと思っ たがすぐにやめた。当たる瞬間火が手に集まったからだ。カカシは距離をとり手裏剣を投げる。ライタはそれをクナイで受けまた印を組む。

「不知火型」

炎が体から放れカカシを襲う。炎はカカシを焼き尽くした。そう重たい術を解いた。そのときカカシが後ろに表れ気絶させられた。起きたとき丸太の前にいた。

「四人とも忍者をやめろ」

そう宣告された。

## 試験の本当の意味

「忍者やめろってどういうことだよお!!」

ナルトが抗議する。だがライタは試験の意味が分かった。

「チームワークか」

「そうだ。忍者にとってチームワークが一番大事だ」

「でも、鈴は一つしかないのになんでチームワークなのよ!!」

「わざと仲間割れするように仕組んだんだ」

そう言つとカカシは歩きだした。そして

「この石に刻んである無数の名前。これは全て里の英雄と呼ばれる忍者たちだ」

その石を見てライタは俯き始めた。

「俺もそこに名を刻むって決めたーっ!!英雄!!英雄!!犬死にナルトこれは任務中殉職した忍者の慰霊碑だ。それはいつちゃいけない」

ライタが犬死にという言葉に反応して口を挟む。

「そう、これは慰霊碑だ。ここには俺の親友の名も刻まれている」  
カカシは俯いていった。

「お前ら! 最後にもう一度だけチャンスをやる。ただし昼からはもつと過酷な鈴取り合戦だ! 挑戦したい奴だけ飯を食え。ただしナルトには食わせるな。ルールを破って飯を食おうとした罰だ」

カカシはどこかに行った。  
ナルト俺の飯半分上げるよ。ナルトがいなかったら始まらないしね」

そうライタがいうとほかの二人もあげた。

「おまえらー」

カカシがすごい勢いで迫ってくる。

「ごーかく」

「え」「は」など疑問の声あがる。



「忍者の世界ではルールを守らない奴はくず呼ばわりされる。けどな！ 仲間を大切にしない奴はそれ以上のくずだ。」

「これにて演習終了。帰るぞ！」

丸太に縛られたナルトが

「縄ほどけえー！！」

と叫び気づいたライタはほどきに戻り一緒に帰った。

帰り道慰霊碑に名を刻んだ両親の名を思い出し、泣きそうになりながら。

**試験の本当の意味（後書き）**

へたくそですいません

## C ランク任務

演習からしばらく任務をこなし、落ち着いた頃

「だめえー！ー！！ そんなのノーサンキュツ！！！！ ほかのにしてえ」

ナルトがしょぼい任務ばかりだからと駄々こね始めた。

(まあ、たしかにつまらんけど)

ライタはそう思った。けどどぶつう火影に向かってゆうか？ カシ先生怒られたな

「分かった、お前がそこまで言うならCランク任務だ。ある人物の護衛だ。」

扉が開きはいつてきたのは、白髪のを飲んだおっさん。

「なんだあ？ 超ガキばつかじゃねえか。特に一番ちっさい超アホ面お前それ本当に忍者かあ！？」

「アハハ。誰だ一番ちっさいアホ面って」

ナルトは辺りを見る。そして気づき

「ぶっ殺す！！」

「これから護衛する人殺してどーする」  
カカシが止める。

その後里の外で集まった。歩いていると水たまりがあった。水たまりから忍が表れカカシを鎖で縛った。

「一人目」

そう言った後忍びはナルトの後ろに動いた。ライタは気づき動くが遅かっただがサスケの投げた手裏剣が鎖と大木をつなぎナルトは助かった。その後サスケはクナイで鎖を堅くつないだ。だが忍は鎖を外し襲いかかってくる。

「纏い火 皇炎型」

演習の時とは全然違う火をまとい始めた。全身を包む炎は美しくすらある。一人は襲ってきたので手刀を当てた。当てられた部位から

発火忍を包む。そして焼け死んだ。もう一人はカカシが捕らえていた。その後ガトーが関わっていることや忍者が敵にいたこともわかってきた。

その後ライタは里に報告後合流することになった。そして里に報告が終わわり追いつこうと急いだところ。霧の暗部の面を着けた者が前を通った。おもしろそうなのでつけてみたところ。少し見失った。そしてガトーがでてきたので来た方向を見たときに見つけた。そしてしばらくしてカカシたちのことを思い出す。

「あつ忘れてた」

声に出してしまった気づいたときにはもう遅い。捕まってしまった。

## Cランク任務（後書き）

一日一回更新を目指します。

## 脱走（前書き）

更新遅れてすいません。宣言したそばから遅れてしまいました。

## 脱走

「くそつ、なんだこの汚い牢は！！ ネズミがいるぞ。なんていつてる場合じゃないか」

ライタがあげたのは小さな声だったが、暗部の仮面を付けた忍はそれを聞き逃さず、今に至る。この牢は、狭く窓もないクソ部屋でネズミと同居中だ。変な薬を飲まされロクにチャクラも練れない。このままではまずいと行動を起こしたが、あえなく失敗で終わる。

（はぁーあ、こんなことなら体術もつと練習しときゃよかった）  
手枷が付いている、武器にはなるな。

しばらくすると戸が開き

「大丈夫です、僕は味方です」

そこにいたのは自分を捕まえた忍

「はぁ？」

「今から出してあげますから。待っていてください」

「出してくれるってんならありがたいけど。何でだ？」

「元々ガトーには追い忍から逃げるために組んでるだけです。別に恩はありませんし、それにこれで貸しです」

「まあ、ありがとよ」

牢からでて、来た道を戻りながら思った。

（霧が暮れか水影とは親が仲よかつたってこともあるし、あいつを抜け忍から外してくれって頼めばいいか）

ナルト達の元に追いついた頃。ナルトとサスケが木登りをしていった。しかも登っている木には傷が付いていた。森林破壊を進めたいのかな？

「おつ、ライタじゃんかってばよお」

「ナルトなにしてんの？ 森林破壊？」

「ちっがぁーう、修業だつてばよお」

「これが、この森林破壊が？ 驚いた。」

「これやったあと齒何すんの？」

「タズナさんの護衛だつてばよ」

「じゃあこれでいいのかな？ 護衛に回つて」

「ライタはゆっくり木に登つていった。それを見てナルトはがっかりしていたが。用があるのでその場から離れた。」

「口寄せの術」

「鷹が出てきた。」

「これを水影まで」

「ふう、これで借りは返せるかな？」

「手紙を持った鷹が空高く飛んでいった。」



## ガトー（前書き）

これから二日に一回しか更新できません

ガトー

「なっ、なんだあこれは!!」  
タズナが驚いていった。血塗れになった人が横たわっているからだ。

「ば、ばけもの」

霧が立ちこめてきた。

「来るぞお!!」

分身のザブザが来て、それを全てサスケがなぎ払った。

「ほー水分身を見切ったか、あのガキかなり成長したな。強敵出現  
つととこだな・・・白」

「そうみたいですな」

「あつ、あのときの奴」

「君は・・・そうですか。敵だったんですね」

白とサスケが戦いを始めた。

「なあ、あんた戦いなんてしなくていいんだぜ。」

ライタが突拍子もないことを言う。

「何を君は言うんです?」

「霧隠れにはもう話を通してるから。追い忍はこないから大丈夫だ。  
だから木の葉にこないか?」

「ライタ、話が飛びすぎてるから分かるように言ってくれ」

カカシが意味が分からなくなり言う。

「俺が木の葉から戻るときに捕まって、助けてくれたんだ。その借りを返すために何かできないかと思って。思いついたのが霧の抜け忍だって言うし、追い忍もくるって言うから。水影に話は通してあるからもうガトーと組むこともない。それにお客さんが来るからね」  
ライタはある方向を見つめた。そこにはガトーが用心棒を引き連れやってきていた。

「ぞっ」

ライタはガトーに速攻で手裏剣を投げ、息の根を止めていた

「ム力つくんだよ。自分の利益だけ優先しやがって、その根性たたきなおしてやるよ。地獄でな。纏い火 紅蓮型」

用心棒達の周りに火の壁ができた。ライタは目を閉じて呟く。

「火陣 範囲固定 火炎召集」

用心棒を囲んでいた火の壁が用心棒に集まる。

「これで終わったな。なああんたら木の葉に来てくれよ。木の葉は歓迎してくれるから」

そう言ってライタは倒れた。

## 新しい斑

「ライタ、起きるってばよお」

声が聞こえて目を覚ます。身体は万全なはずなのだが、心なしか体がだるい。

「ナルト、あいつらは」

「ふふ、ライタ君僕たちならここにいますよ」

そこには、女の人？ がいた。

「誰？」

「ふふ、僕ですよ」

そう言つと暗部の仮面を付けた。

「おんな だつたのか」

「ライタ君僕は男ですよ」

ありえん。目の前にいるのはサクラよりも透き通った肌をしている女のはずだ。新手の詐欺かそんなうそで俺をだませ留と思っちゃいけないな。

「うそはいいから」

「本当です」

「うそ」

「本当です」

「分かったよおとこなんだな。そんなことはおいといて木の葉に来る件は考えてくれたのか？」

「ええ、その件なら。いいですよ」

「じゃあきまりだ。早く帰って火影様に伝えなきゃな」

そう言つてたつた瞬間。違和感を覚えた。

「なあ、ライタあの術使つてくれよなあ。また見たいってばよ」

「ああいいぜ」

チャクラを練り上げ、身体の周りを包む。そしてチャクラを火に変える。

できない。全くをもってできない。こんなことは初めてだ。

「どうしたんだってばよ」

「使えなくなってる」

切り札を失った喪失感と絶望。しかし、木の葉に帰らなくてはいけ  
ないので、帰っていった。

## 新しい斑（後書き）

更新がぜんぜんできなくてすみません。

次回はもっと早くします。

次は三代目火影との修業を話にするよていです。どうかよろしくお願ひします。

## 三代目との修業

里への報告が終わり。晴れて白とザブザは木の葉の一員となった。だがライタの表情は曇ったままだ。

「どうしたんじゃ？ ライタは」

三代目が聞いてきた。

「はあ」

それにため息で返し、ふとひらめいた。

「三代目直々に修業つけてもらえませんか？」

「……はい？」

みんなが突然のことに聞き返してきた。

「だから、切り札がないなら新しく教わればいい。それに、三代目は木の葉の全ての術を使えると聞くし」

「だーめ。火影様は忙しいの」

カカシがライタを止めた。

「まあまあ、カカシ暇なときに教えればすむことじゃ」

「しかし……ふう、お願いします」

「じゃあ今日から教えるからの。あと、斑は新しく白とお主でいいじゃろ。担当上忍はザブザじゃ」

三代目の修業は、性質変化から始まった。どうやら自分の性質変化は火と土らしい。

「ほう、二つももっていたのか。下忍には珍しいんじゃがのう」

それだけいって、修業は始まった。基本的な術から、大業まで教わった。修業自体は優しいが、術の量が量なので困難を極めた。

30日目ようやく修業は終わり最後に心得を教えてもらった。  
「木の葉はわしの家なんじゃ。そしてわしはその家の大黒柱。家を  
支え生きてゆくそして見守っているんじゃ。子供達は可能性を秘め  
ている。お主もいずれ気づくじやろう」  
意味が分からなかったが、心にしみてきた。

三代目との修業が終わった。そして家に帰って眠りについた。



## 中忍試験

「中忍試験を受けてもらう」

「Why?」

おつと間違えて英語で答えちゃったぜ。だが意味が分からんのは確かだ。

「簡単に言えば中忍になるための試験だ」

簡単な説明を受けて、試験会場に向かった。

「暑苦るしっ!!」

博に氷を出してもらい、机に座って寝ることにした。

Zzz

起きると試験が始まっており、残り時間あと二十分だった。何で誰も起こしてくれないのさ。うわ〜ん。ペーパーテストだし、もうやってられん。ぱぱと答えを書いて最後の問題を待った。だが、また寝てしまった。

## 中忍試験（後書き）

ライタの術募集します。

熔遁 火遁 土遁の三つです。

キャラも同時募集するのでキャラは、設定等を書いて送ってください。

よろしくお願いします。 期限は5月16日までです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8704k/>

---

ナルト 木の葉の守護炎

2010年10月10日02時39分発行